



Title	<紹介> 尹芷汐著 『社会派ミステリー・ブーム 日中大衆社会と〈事件の物語〉』
Author(s)	田中, 聡一
Citation	語文. 2023, 121, p. 60-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

尹芷汐著

『社会派ミステリー・ブーム 日中大衆社会と〈事件の物語〉』

田中 聡 一

本書は、日中の様々なメディアを媒介とした作品と作家のイメージが増殖し変容するさまを、松本清張を代表とする「社会派ミステリー」作家の作品の読解を通して描いている。

著者は序章にて、松本清張作品の膨大な先行研究を丁寧な整理し、「ミステリー」という類型がアプロオリに想定されていたことを問題視する。それを受けて、「ミステリー」すなわち「事件」が構築される様式に注目すべきとする。この問題意識のもと、本書の目的は次のようになる。すなわち「松本清張文学への評価の更新」ではなく、広範なメディアにおける「事件」の表象をてがかりに、「戦後日本及び東アジアの文化構造的再編成の問題として、社会派ミステリー・ブームを捉え直すこと」（四頁）。この姿勢の妥当性・説得性は、清張だけでなく、東アジアにおける「社会派ミステリー」等の先行研究の丁寧な整理から裏付けられる。

以下、本書の章立てを記し、本書の概要を示す。

序章 〈事件〉を物語る時代

第一部 戦後日本のメディアと〈事件の物語〉

第一章 『週刊朝日』と松本清張——小説「失踪」の語りから考

える

第二章 「事件」とメディア・世論——松本清張「遭難」と井上靖「氷壁」の「登山者」表象

第三章 「内幕もの」の時代と『日本の黒い霧』

第四章 「悪女」の作られ方——松本清張の小説と映像の交錯

第二部 冷戦期の日中における社会派ミステリーの流通

第五章 新中国の「内部発行」と社会派ミステリー——『日本の黒い霧』と『日本の黒霧』

第六章 「軍国主義批判」の中の日本文学——三島由紀夫『憂国』と松本清張『日本改造法案——北一輝の死』の翻訳と受容

第七章 「事件」と戦争の記憶——鄧友梅『さよなら瀬戸内海』と森村誠一「七三一部隊」シリーズ

第八章 名探偵の「死」とその後——日本の社会派推理小説と中国の法制文学

第九章 ナショナルな表象とトランス・ナショナルな記憶——西條八十「ぼくの帽子」と映画『人間の証明』

第一〇章 松本清張と連環画の遭遇——イメージの増殖と変容

あとがき

以上に加え、松本清張の映画化作品一覧、一九五〇～六〇年代に中国で刊行された日本の書籍、五〇～八〇年代に中国で「内部発行」（資本主義陣営の小説などを批判的に紹介する目的で限定的に翻訳・発行されたもの）により出版された日本の書籍、七〇～八〇年代に中国で翻訳された社会派ミステリー作品、日本文

学・映画などの連環画（小説や映画を写真や漫画で場面を区切つてセリフを施した、中国に独自のメディア）化作品の一部（七八（八九年）をそれぞれ詳細かつ膨大にまとめた「資料一―五」および索引が付されている）。

構成からも明らかなように、本書の議論は多岐にわたる。以下、その内容を概観していく。

第一部では、五〇年代の日本における松本清張作品と諸メディア（週刊誌、新聞、映像化）との関わりを通じて、清張作品の評価がなされる。著者は、五〇年代を日本のメディアの地殻変動が起こった時期とする。中間層を対象にした週刊誌の刊行、占領期の自己検閲に起因するメディア不信と「内幕もの」（歴史と政治の「内幕」を語る体裁の作品）の流行、テレビの普及による映画界の刷新などがそれである。

これらのメディアの動向と清張作品の方法とは親和的であり、いわゆる「松本清張ブーム」はメディアと切り離して捉えることは出来ないとする。第一章、第二章、第三章では、他のメディア言説と清張作品の語りの方法に焦点が当てられる。結果、清張作品がメディアの流布する「知」を、読者を巻き込む語りの方法に依って挑発しているとして評価される。

第四章では、作品の映像化に焦点が当てられる。著者は、従来の議論で清張作品が映像化されるようになったことを自明に、つまりその理由が不問に付されてきたことを問題視する。結果、清張が雑誌ごとに作風やテーマを変えていたことが、映画会社ごと

に異なるシナリオ作成の姿勢に対応を可能にさせたとする。また、清張作品における「悪女」イメージの展開が『顔』映画化の時期に即応することを指摘し、メディアミックスなイメージの再生産過程を明らかにする。

第二部では、松本清張・森村誠一の「社会派ミステリー」を始めたとした日本文学作品が、中国語に翻訳され、流通する中で、作品や作家のイメージが国境を越えて変容するさまを立体的に描き出す。第六章、第七章では、翻訳を介して文学テキストが共産党政権のイデオロギー保証システムとしての「内部発行」を揺さぶることになるさまが明らかにされる。

特に第七章では、章題にある二作品の語りの方法の差異が指摘され、戦争の記憶の「事件」化をめぐる方法の緊張関係が描き出されている。第八章では、八〇年代に成立した「法律と犯罪を反映する文学と芸術」である「法制文学」が日本の社会派推理小説を補助線にしていたことが指摘される。ここでも「内部発行」と翻訳の関係性に見られたような、文学テキストと社会システムとの拮抗関係が指摘される。

第九章では、西條八十の「ナショナル」な詩が時代と国境を越えて、「インターナショナル」な枠組みを想起させることを明らかにしている。第一〇章では、清張『砂の器』の連環画に、日中の社会状況の差異などが複雑に折りたたまれていることを明らかにしている。

著者の膨大な調査、先行研究および個々の作品の緻密な読み込

みの成果が、本書には遺憾なく発揮されている。巻末資料を含め、読者に益するところ大である著作と言えるだろう。

(花鳥社、二〇二三年二月、二九二頁、四、五〇〇円＋税)

(たなか・そういち 本学大学院博士前期課程)